

様式2 令和2年度 清瀬市立 清瀬第三小学校 学校評価表

学校教育目標	○よく考え やりぬく子ども(重点目標) ○やさしく 思いやりのある子ども ○明るく 元気	育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動	【育成を目指す資質・能力】 「協働問題解決能力」 ○基礎的な力(言語、数量、情報スキル) ○他者と共に考える力(協働問題解決力、メタ認知) ○他者と共生できる力(人間関係形成力) ○社会の中で実践する力(社会参画力、自律的活動力)	【特色ある教育活動】 重点1 「協働問題解決能力」を中心に学力の向上を図る 重点2 他者と共生できる豊かな人間性を育む 重点3 「協働問題解決能力」を育む学校支援本部の活動を保障し、地域に開かれた学校づくりを推進する。
目指す学校像(ビジョン)	【目指す学校像】 【目指す児童・生徒像】 【目指す教師像】			
前年度までの学校経営上の成果と課題				

柱	具体的方策	自己評価		学校関係者評価	次年度以降の改善方策	
		評価	課題及び次年度以降の改善方策(案)			
		取組評価	成果評価	学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策		
確かな学力の向上	1時間の学習展開の中で全員が自分の考えを表現する場面を作り、全員参加の授業をつくる。	4	3	「書く」等の表現方法に工夫をし、全員が参加できるように、配慮している点が良い。「ノート大賞」等の取り組みも良い。	「書く」の力の向上を図るための研究を継続していくとともに、「話す」技能など表現力の向上を図るよう授業改善に取り組んでいく。	
	どの子どもすすんで書きたくなる課題づくりやグループ学習の方法を工夫し、考えを広げたり深めたりできる授業をつくる。	4	3	課題提示の工夫が、児童の意欲にも繋がってきた。ただ、低学年では、課題に積極的に取り組める児童と、課題把握に個別支援を要する児童とに二極化している様子が見られる。また、高学年でも、理解の深さに差が見られるので、よい記述や発言はみんなで取り上げ、全体の学びを深められるようにした。グループで話し合ったり、アドバイスをし合うことで、児童が互いに高め合う姿が見られた。	教師が一方向的に教えるのではなく、子供同士が高め合うように工夫されている。	協働問題解決型の学習を継続して行う中で、児童が話し合うことで互いに学び合い、高め合う学習を行っていく。また、個別支援を要する児童に対しても学習方法の工夫を行っていく。
豊かな心の育成	「挨拶と返事」が確実に身につくように、学年・学級で工夫して取り組む。児童会での取組みを強化し、児童が自分から挨拶できるよう意識の向上を図る。	4	3	低学年は、担任や職員等の教職員に対しての挨拶は定着してきている児童が多いが、誰にでもできるという点では課題である。中学年では、専科教室での授業、入室や退室の際に挨拶をするように指導して、身につけている。また、返事をすくせつについて、教職員や生徒から自分から挨拶する児童が少ない。できた児童には、その姿を褒めていき、朝の会でも引き続き指導していく。高学年では、積極的に挨拶をする児童は自分から朝の挨拶をし、相手も元気に挨拶している。しかし積極的な挨拶をしていない児童は、名前呼びやたたき返事をしないこともある。そのような児童にはその都度指導をしていく。また、学校だけでなく家庭での実践も必要である。	学校の中では挨拶が出来ているということは、評価できる。周囲の大人たちが子どもたちのモデルになるということも大きな要素である。	引き続き、学級での指導や児童会による「やまびこ週間」の取り組みを行っていくとともに、家庭・地域とも挨拶についての課題を共有し、児童に日常的に挨拶する習慣が身につくよう指導していく。
	どの子ども学級に居場所があるように、いじめ未然防止の取組を学年毎に工夫して行う。	4	3	低学年では、道徳の年間計画に位置づけ、計画的に指導したり、係や当番活動で学級のために仕事を頑張る児童を認め、褒めることで、児童同士でも認め合っている。中学年では、嫌だったことをすくなく伝えられる児童が多いため、嫌だったことをすくなく伝えることができる。児童が安心して学ぶことができる。ふれあひアンテナにはいじめとみられるものもあつたので、引き続き注意深く見ていく。また、きりらの先生や家庭との連携を取り続けていく。高学年では、「教室をみんなが通いやすい場所にしていく」と考えて行動できる児童が徐々に増えてきた。しかし、アンテナでは見えないこともあり、相手も聞ける言葉も考えずに行ってしまう児童もいるので、継続的に指導をしたり、絶えずアンテナを張り巡らせて児童の様子を見ていく必要がある。	校内委員会、生活指導連絡会、いじめ防止対策委員会等の学校の取り組みが理解できた。相談の敷居がもう少し低いといい。SSWなどの第三者が入ることも一つの方法ではないか。	児童の頑張りを認め励ますことについて、継続して全校で取り組んでいく。校内委員会、生活指導連絡会、いじめ防止対策委員会等の取り組みを継続していくとともに、必要に応じて、子供家庭支援センター、SSWなどの他機関と連携を密にしてい
健やかな体の育成	体力向上旬間の取組では、個人や学級毎に目標数値を掲げて取り組む。	4	3	成果として、なわとび旬間では、自分のめあてに向かって活動している児童も多く担任や体育委員会の検定に意欲的に挑戦する児童が多かった。基礎体力は、ほぼコロナ禍以前に戻った。課題として、意識的に取り組む児童も、そうでない児童の差が大きかった。意識的に取り組めるように、声かけをする必要がある。また、「球技」などが通常通り実施することができなかったのが、通常通り実施する方法を考えていきたい。	新型コロナウイルス感染症感染防止の中、工夫して進めていることがすばらしいと思った。	次年度も感染症防止対策を講じながら、なわとび旬間や持久走旬間等の運動の場を充実させ、児童が進んで運動に取り組む、体力を向上させる機会を増やしていく。
	「早寝早起き朝ごはん」点検の結果等を使って、児童と保護者に対して生活習慣への啓発を工夫して行う。	4	3	保護者会や学年だよりで周知をしたり、休み明けの点検カードにより取り組んだりしたこと、いつもより生活リズムを整えようと努力する家庭や児童の姿も見られた。また、ネットゲームの影響もあり、寝る時刻が遅く、朝早く起きるのを苦手とする児童がいる。引き続き規則正しい生活の重要性を繰り返し、保護者及び児童へ伝えていく。	学校でできることは、進めてもらっている。	家庭と課題を共有し、「早寝早起き朝ごはんカード」等の取り組みを通じて、規則正しい生活リズムを整え、健康に過ごそうとする児童の意識を高めていく。
特別支援教育の充実	週1回の校内委員会・年3回以上の研修会を実施し、個別支援の必要な児童についての共通理解を図り、指導・支援の方法を共有し、指導に当たる。	4	4	個別支援の必要な児童について、校内委員会などで情報共有することで、指導に生かすことができた。当該児童における改善も確認できている。研修会については、3回以上実施できなかったため、来年度から実施していきたい。	児童の課題について、学校全体で共有できていることが良い。担任以外の教職員もその児童の特性を理解して関わっていることは素晴らしい。	引き続き、校内委員会や生活指導連絡会を通じて、教職員間で個に応じた支援が必要な児童への対応を共有していく。研修会については、年3回の研修を位置づけ、実施する。
	保護者会の際に特別支援コーディネーターによる説明や資料提供を行う。	4	3	保護者会の際の特別支援コーディネーターによる説明を全学年で実施していきたい。また、「きりりだより」を保護者が関心を持ち、目を通していただけるよう、来年度も教員からの声かけを行ってきたい。	保護者への説明の機会を継続してもらいたい	保護者会の際の特別支援コーディネーターによる説明を全学年で実施する。「きりりだより」を通じて、保護者に特別支援について関心をもってもらえるよう、発信の方法を工夫していく。
本校の特色	感染症対策を図った上で、異学年交流を図ると共に、学年ごとに地域や保護者等との参画型授業・出前授業等を計画的に工夫して行う。	4	4	・町たんけんや本鼓教室で、地域の方々やゲストティーチャーとの関わりをもたことで児童が意欲的に活動した。また、異学年交流も目的をもって行うことができた。今後も地域の方々との連携を図って計画的に行っていく。 ・特別支援学校との交流会をリモートで行い、お互いを知ることができた。異学年交流で、下の学年の児童を思いやり、手助けしたりしながら、一緒に活動することができた。 ・感染症対策を行いながら、異学年交流や、出前授業等をこれからも計画していきたい。	新型コロナウイルス感染症対策の中でもたくさんの活動を実施していただいたことは、高く評価できる。	感染症対策を行いながら、地域の方や専門家を招いての学びの場を設定していく。異学年交流や清瀬特別支援学校との交流も継続して実施することで、「他者と共生できる豊かな人間性」を育む。
	読書への興味を高める取り組みを、学期毎・学年毎に計画して実施する。計画的に俳句作品の掲示や発信を行う。	4	4	・本の時間に読み聞かせをしてもつたり、図書室の時間を実施したりしてきた。今後も継続して行っていく。 ・児童の興味関心を考慮しながら、いろいろな本を紹介した。読書旬間中は特に意欲を高めていた児童が多かった。 ・意欲的に読書をし、本を借りる児童が多いので、読書を増やしていきたい。 ・児童が読む本に偏りがあるので、様々なジャンルの本を紹介し、幅広い読書ができるようにしていく。 ・定期的な俳句作りを行うことで、児童が季節を意識しながら俳句作りを行っている。また、レベルの高い作品も数多く見られるようになり、石田波郷俳句コンクールでは入選する児童も出た。	読書郵便や高学年による読み聞かせなど、次年度も継続してもらいたい。	週1回の「本の時間」や学期1回の「読書旬間」に引き続き取り組むなど、児童の読書への意欲を高め、言葉を習得する機会としていく。俳句づくりも継続して取り組み、表現力の向上を促す。